

LST (米国の貨物船) で母国へ。この船中で子どもはハイハイを始める。一か月かかって帰国。夫はシベリア抑留中死亡。栄養不良で一年たっても立てなかつたその子どもが、今は二児の母。長かつた四十五年の歲月、夢中で生きてきた今、ここで一息入れて、私きり知らないあの日の夫の映像を一日も長く思い、老いの春秋を元気に楽しくボランティアに入ったり、高齢者学級へ行ったりして過ごしています。

強盗にあつたチチハル

東京都 水谷 寧子

私達家族は、北滿のチチハルに住んでおりましたときに、敗戦を迎えました。

十一歳を頭に、末の弟はまだ乳呑み児でした。

満州国政府の要職を歴任した父は、同年の十月に、ソ連軍將校数人の、丸一日にわたる家宅捜査の末、馬車に乗せられて、肌寒い夕暮れの道を連行されました。まだ

子どもだった私にも、この連行は十中八・九、父とこの世の別れになるのではないかと、うすうす感じていました。

その後の、残された家族の生活は、筆舌にはつくせないほどの惨めなつらいものでした。が、その当時の私という子どもの目に映り、肌で感じたものの一端を、感情移入を避けて記憶をたどってみたいと思います。

母の話によると、あの八月十五日を期して、統治は無政府状態となり、物価は十倍にはね上がったとのことです。ゆえに、あの何も頼るものがない中で、ただひたすら、自分達の生活の糧を得ることに奔走した一年でした。

まだ若かつた母の外出は危険だったのでしよう、十一歳の私と十歳の弟が一家の生計を立てなければなりませんでした。

煙草売り、パン売り、ふとん屋の手伝い、着物売り、そしてある時は夜、人形を作り、昼売り歩く、ということもやりました。いくらにもなりませんでしたが、それでも一家八人の糊口をしのぐ足しになったものでした。

チチハルに在住した日本人は、できるだけ危険を避けるため、市の中心に集結して暮らしておりました。日本人会の敷地内で、女、子どもだけの心細い生活を送っていたある真冬の夜半、私たちは十人組の強盗に襲撃されたのです。二台の馬車に、まさかのようなものを手にした彼らは、家の中の私達の生活必需品を、手あたりしだい運びこみました。

寒さと恐怖に歯の根もあわない状態でした。しかし、私達は、生命までは失わずにすみました。白みゆく窓外の、屈強そうな男たちが、黙々と盗品を馬車に積んでいたあの光景は、今も鮮明にまぶたに焼きついています。

走り行く馬車の音も消えぬうちに、ソ連の警備兵が何人かきてはくれましたが、申しわけのように、一、二発ピストルを発射しただけでした。

腕に掛けて街で売り、飢えをしのいだ母や私の着物が入れてお金を作る道を探らなければなりません。知恵をしぼって、バザールのわきに屋台を借りて、野菜売りを始めました。武士の商法ながら、けっこう売

れ行きがよく、気を良くしていたある冷えこんだ朝、私達の大事な商品ジャガ芋は、ことごとく凍ってしまっていたのです。多くの凍ったジャガ芋を前に、途方に暮れましたが、次にこれをもとにコロッケを作り、売ってみましたら、これもよく売れました。

思えば「盲、蛇におじず」のことわざ通りの毎日でした。しかし、あの混乱の中でたくましく生き抜き、終戦の翌年の八月、一人も欠けずに帰国することができました。

ソ連に連行抑留された父は、昭和三十一年十二月、すっかり年を取り、身体を痛めて、帰ってきました。在ソ中の無理と栄養不足がたたってか、なかなか回復も思うようにまかせず、老骨にむち打って、一家再興への努力でしたが、ついに昭和五十一年他界しました。

父の生涯は、国策の犠牲以外の何物でもなかったように思われます。純粹に祖国の政治を信じ、大東亜共栄圏の確立を信じ、それに殉じた一生でした。

このたび、この稿を起すにあたり、本来ならば、母がなすべきところ、老いが進み、筆の運びもままならぬ

ゆえ、長女である私がかかりました。

毎日が不安と恐怖

東京都 山内弘子

満州国奉天省蓋平（ガイヘイ）という所に居住していました。小さな街でした。農園が多く、リンゴ栽培には適した土地、気候に恵まれていました。父は若いときに大陸に渡り、この土地に根をおろし、リンゴの木を広大な土地に植えたのです。たいへんに苦勞をして育てたそうです。

戦争が始まってからは、リンゴは軍におさえられ、自由で販売することもできなかつたのです。当時、私は女学生でした。

二十年八月十五日、思いもよらぬ無条件降伏、終戦の詔勅にただただ啞然、ぼう然とするばかり。泣き出す人、くやしがる人、皆の姿もさまざま、戦争には勝つとばかり信じていた私達、なぜ最後まで戦わないかと思つた。

敗戦ときまつたその日から、手のひらを返すように中国人達が変わつた。

日本人は一文無しで満州にきたのだから、裸で帰れ、と口汚くののしる者もいた。十八日頃からソ連軍、八路軍、中央軍と入れかわり立ちかわりはいつてきて、そのつど軍票がかわつた。

治安はなかなか落ちつかず、毎日デマがとび、日本人が殺されたなどと聞く。民家の家に土足であがり、自動小銃を持って目ぼしい物を取り上げて行く。女、子どもはおどかさされ、泣き叫び、助けを求める。でもどうすることもできない。敗戦のみじめさ、まさに生き地獄。

なぜこのような悲惨な日にあわなければならぬのでしょうか。母は私の身を案じ、夜も眠れず、天井や床下に私を隠した。通過部隊が通るたび、一日何回も土足であがられたのです。母は思いきつて私の髪の毛を切り、断髪して、男の服を着用させた。顔には鍋ズミをぬり、真つ黒な顔をして、男女の区別がつかぬようにしたのです。

ある日、ソ連司令官の館でパーティーが開かれるの